

# 学校自己評価システムシート (平成30年度)

目指す学校像	・音楽芸術の一貫教育を通じ、情操豊かな人格の形成を目指す	学校名	東邦音楽大学附属東邦第二高等学校
本年度の重点目標	・音楽基礎科目の学力の更なる充実 ・普通教科の基礎学力の定着と充実 ・基本的な生活習慣の確立、綺麗な言葉遣いをする、思いやりのある人格形成 ・音楽活動を通して、積極的に地域貢献活動への参加と舞台芸術（プロのオペラ団体との競演）への意欲的な取り組み	課程	全日制・音楽科

年度目標		中間評価		年度評価				
領域	評価項目	現状と課題	具体的方策	方策の評価指標	進行状況	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
学習指導	○ 音楽基礎科目(ソルフェージュ、楽典)の基礎学力の養成とそれを生かした専攻実技への取り組み方への検討	・近年、生徒の音楽基礎科目の学力差が顕著になってきている現状がある。専攻実技の演奏技術と音楽表現力の育成には、ソルフェージュと楽典の力を専攻(ピアノ、声楽、管楽器・弦楽器・打楽器)の特性に合わせて、如何にして、改善・対処していくかが課題となった。まず、レッスン担当者が生徒スキルレベルを客観的に理解した上で、その生徒にあった指導方法・指導内容を検討し、それを実践していった。次に、それがどのように演奏に反映されているかを正確に把握し、そこで出てきた『課題』を再検討して進めて行いった。	・先ず、7月の期末試験・前期実技試験の時期までを目標にして、ソルフェージュ、楽典の授業担当者とレッスン担当者が、いくつかの基礎力をチェック出来る観点項目を設定し、それぞれの観点項目の評価を基に、個々の生徒の基礎学力とスキルを把握し、指導の方法の修正を図った。但し、試験曲の曲曲にあたっては生徒のモチベーションを向上させる為に、生徒とのコミュニケーションを密にし、意欲関心を鑑みて決定していった。	・一学期のソルフェージュ・楽典の基礎力と前期の専攻実技の基本的なスキル状況を基に、生徒個人個人に『夏期休業にすべき課題』を提示し、その達成度を8月下旬の補講期間に確認することとする。その状況を把握し、ソルフェージュ・楽典の指導方法・内容を検討し22、3学期の指導に反映させていく。一方、特に専攻実技に関しては基礎的な演奏技術で完成度の低い部分に関しては、徹底的にクリアさせる事を目標に指導していった。	・ソルフェージュ・楽典の基礎力は全体的には確実に養成されているものの、数名の生徒に関しては学力の定着が難しく、個別指導での対応を検討し、実施した。なお、高い学力の生徒達に足踏み状態に陥ることのないように、授業の指導方法・指導の題材の工夫を試みた。	・高校3年生の『内部推薦入学試験』の科目として、楽典・ソルフェージュがあり、基礎学力の定着・充実必須であり、更には大学進学後も音楽理論の修得には必要不可欠であった。その為、『楽典』に関しては、3年生の『楽式』の授業の中で『楽典』の過去の入試問題を取り上げ、それを解答していく中で総復習を実施した。	A	・生徒の音楽に関して(特に楽典、ソルフェージュ)の能力・学力が多様化している現状の中で、生徒一人一人のその基礎力の養成、更には専攻実技技術の基礎力、表現力の養成は、ますます重要な課題となっている。音楽大学附属高校としては、高大接続の視点から、高校・大学の7年間で音楽を通しての一貫教育の中で検討・考察していくこととする。
	○ 普通科目の基礎学力の定着と充実	・中学校教育での主要3科目(英語・数学・国語)の基礎学力の定着が十分でないケースが見受けられる。これは、ある意味では、ゆとり教育の反省から、各教科の指導要領の内容にかなりかなりボリュームがあり、音楽科受験者には入試に専攻実技が課せられるため、その準備に時間が掛けられている傾向がある。そこで、これらの教科の指導に於いては、適宜、中学での内容の復習を取り入れながら、その内容がどの程度理解され、学力として定着がされているかを確認しながら指導していくこととした。	・基礎学力の確実な定着を目指した指導に当たっては、各担当教員は、 ①当日の授業のポイントを具体的・明確に生徒に提示する。 ②授業内で可能な限り、質問・小テストなどで理解度を確認する。 ③生徒が授業内容が正確に理解されているかどうかの確認、ノートの検査等で再確認する。 ④各学期の評価に当たっては、観点別評価により、学習への『意欲・関心・態度』の状態を判断する一つの手段として、提出物の徹底を図る。	・基礎学力の定着に関しては、『反復学習』による効果が認められる。 ①国語の指導の中の『漢字ワーク』の定期的な提出と『漢字テスト』の徹底した反復指導による効果は顕著である。 ②英語では毎学期適宜、『課題(英文の要約、スピーチ原稿の作成とスピーチの実施等)』を課すことにより、4つのスキルの向上の確認を行なった。	・教科・科目(音楽科科目も含めて)の指導、そしてその評価に於いては、『各学期の評価』は ①定期試験の結果 ②課題の提出、ノートの提出、普段の小テストの結果 ①と②を総合して評価する観点別評価を取り入れている。日頃の各教科・科目の『学習への意欲・関心・態度』も重要な評価方法を改めて生徒・父母に伝え、日頃の学習への取り組みの大切さを再確認させた。	・近年、生徒の学習・学校生活に取り組み姿勢が多様化してきている。その中で本校の教育の基本方針として掲げている、『学習評価方法』～学習指導要領の目標としている、『知識や技能の到達度』+『自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力』の評価を基本とするものが、生徒一人一人の学習意欲の向上、生徒個人に自己の学習到達度を認識させる観点から、『意欲・関心・態度』の評価～生徒のやる気～にどれだけ結びつけて行けるかが課題と思われた。		・生徒の学習に対する『意欲・関心・態度』を評価するノート、課題、レポートの提出に関しては、教科担当教員と担任との連携で、提出率は各学年・全ての教科に於いて100%に至っている。これは、生徒の基本的な学習習慣を確立する上で大きく貢献している。 生徒の『学習意欲』を更に向上させ、自らの力で『自分にとっての様々な課題』を解決していく『問題解決能力』を身に付けさせるのが今後の課題である。
生徒指導	○ 基本的な生活習慣の確立の指導 綺麗な言葉遣いの指導 思いやりのある人格の形成指導	・基本的な学校での生活習慣の確立の中で特に、『時間厳守の指導』の徹底を図った。特に、放課後の楽器の自主的な練習時間(延長練習は届け出制：夏時間は6時まで、冬時間は5時半まで)が有効に使われているかを(集中した練習がなされているか)検証した。 ・綺麗な言葉遣いの指導：友人間、教員に対する言葉遣いが適切でないことが見受けられる。場を弁えた言葉遣いの指導をその都度実施。 常に相手の立場に立つて物事を考え、公正・公平な判断力を身に付ける様、HRや全校集会の講話で指導した。	・時間厳守：時間の自己管理が出来ていない生徒がおり、授業・レッスンに遅れてくるなどで、基本的な集団生活での『時間の自己管理』の意味を自覚・認識させる指導をしていた。 ・言葉遣い：友人間のたった一言で、大きなトラブルを引き起こすことがある。適切な状況判断の基での言葉の使い方を指導していった。 ・LHRなどクラスとして一人一人が協力して、一つの目標に向かって取り組む行事(合唱コンクール等)では、相手の意見・考えを尊重した上で、自分の考えを述べるというプロセスから、『相手への思いやり』の気持ちを認識していた。	・時間厳守：生徒には、常に時間に余裕を持った行動をとるよう指導をしていた。 ・言葉遣い：コミュニケーションの如何なる場合でも、相手の立場・その場の状況を的確に判断して、お互いの意思疎通に支障がないように努めることを指導していった。 ・『思いやりのある人格の形成』は、学校という“小さな社会”の中で様々な生活環境の生徒ととの、日々の人間関係の中から培われるものであることを改めて生徒の認識させた。	・今年度の『生徒指導方針』の一つに掲げている『時間厳守』は色々な機会に繰り返し指導を継続してきた。大きな改善が認められてきたものの、徹底されていない現状がある。 『言葉遣い』に関しては、不適切な言葉の使用があった場合、教員がその場で指導する方法を根気強く継続していくこととする。 『思いやりのある人格の形成』は、学校という集団生活の中から身に付けると同時に、生徒の保護者との連携の基に、家庭生活に於いても同一歩調で指導していくことで、相乗効果が得られるものという考えに至った。	・基本的な生活習慣の中で『時間厳守』は学校として総力を挙げて、基本的な学校生活の規律の一つとして取り組んできた。指導の効果は得られてはいる。しかし、ある面で家庭での『時間厳守』に対する認識にバラつきが有るように受け止められる面が感じられた。 『言葉遣い』に関してもチームワーク同様ことが言え、学校と家庭と生徒一人一人がきちんと身に付け、社会人としてのコミュニケーションが確立出来ることを目指して全教員が根気強くの指導に当たることとする。 『思いやりのある人格の形成』は、本校の教育理念としても掲げており、更なる確立した取り組みを目指すこととした。	B	・『時間厳守』は当然社会に出る前に身に付けておかねばならない不可欠なものであるという認識の基に、継続して来年度も『基本的な生活習慣の確立の最重要課題』として挙げ指導していくこととする。 『場を弁えた言葉遣い』に関しては、高校生活の中で生徒一人一人がきちんと身に付け、社会人としてのコミュニケーションが確立出来ることを目指して全教員が根気強くの指導に当たることとする。 『思いやりのある人格の形成』は、本校の教育理念としても掲げており、更なる確立した取り組みを目指すこととした。
	○ 携帯電話の安全且適切な使い方の指導 『携帯電話安全教室』の実施 (9月1日(土)11:00～12:00) 『薬物乱用防止教室』の実施 (6月21日(木)13:10～14:00)	・本校での携帯電話の指導：校内への持ち込みは許可制とする。秩序ある使い方の指導をHRや全体集会で指導している。 今年度は特に、『携帯電話安全教室』の中で、『SNS』の使用にあたっての、具体的な問題事例をあげたトラブル・危険性について説明、指導がされた。 ・薬剤師を講師に招き、パワーポイントで具体的に薬物の恐ろしさ等が紹介された。	・校内における携帯電話の使い方を徹底させる： 携帯電話は各クラス、朝のHRで担任に提出、帰りのHRで担任より返却。校内での使用は禁止。あくまで、登下校時の安全確保をその使用目的の趣旨としている。 SNS等の使用にあたっては、『限られた状況の中でのコミュニケーション』では、一方的な会話になったり、誤解を生じる表現の可能性など、SNSの特性を理解・指導する。	・校内における携帯電話の提出・返却に関しては徹底できている。しかし、SNSに関しては、学校としてすべてを把握することは物理的に不可能な現状がある。 マナー・モラルの観点からの指導など、まだまだクリアしなくてはならない課題が残っている。	・社会にSNSに起因する多くの事件・事故が多発している現状がある。本校に於いて、現時点ではSNSによるトラブルは発生してはいない。しかし、この社会状況・家庭環境を考えた時、いつ発生しても不思議ではない環境であるため、生徒のみならず学校も緊張感をもって注意を払っていかねばならないことは不可欠であると認識している。	・今年度で実施してきた『携帯電話安全教室』は継続しつつ、更にあらゆる角度からの対応で事故・事件防止に努めるための方策を検討していくこととする。		・『全体集会』『ホームルーム』や来年度も『携帯安全教室』などにより、携帯電話の指導は継続して事件・事故が起こらないように指導していくこととする。
進路指導	○ 高大接続を意識した、高校・大学の7年間を組織的な教育システム(特に専攻実技におけるカリキュラム)により音楽教育を実践	・音大附属のメリットを生かした高校教育・カリキュラムの実践、専攻実技の課題曲に関しては、将来、系列大学・短大に進学した後、より効果的・効率的に演奏スキル、表現力を身に付けるためのベシックススキルの養成を目的に組織的に組み立てられている。その他の音楽科目としては音楽理論、ソルフェージュ、また、普通科目に於いては外国語(ドイツ語：3年生で2単位)など将来を見据えた履修体制を取っている。大学卒業後、グローバル社会との関わりを視野に入れた、いかにして自己実現できるスキルを修得させていくかが課題となっている。	・今年度、大学・短大の教員により実施されている『大学・短大進学講座』は高校生達に、大学・短大の教育の内容の理解と、将来大学・短大で自分がどの分野を専攻していくか、更にはどのような力を身に付けて社会と関わって行こうかを検討する良い機会となっていた。大学生・短大生とのコミュニケーションのコーナーでは、学生生活での様子が紹介されるとともに、キャリア教育の実体験も高校生達には良い刺激となっている。更に、生徒達が大学・短大の『体験授業』を受講することで高大接続の教育の意義を生徒達が直接経験することが出来た。	・系列大学・短大への進路指導という観点から、『大学・短大進学講座』『大学・短大体験授業』が、各学年に於いて、どのような位置づけになっているかを正確に把握する必要がある。それを踏まえて、附属高校生にとって『音楽』という芸術を幅広い見地から捉える為に『大学・短大進学講座』『大学・短大体験授業』の目標の設定を再確認する必要がある。更にその結果と進路指導とをどうリンクさせていかかが更なる課題である。	・『大学・短大進学講座』『大学・短大体験授業』を高校生が受講することによって、生徒達が将来『音楽を生かした社会との関わり』を高校生時代から意識して考え、大学・短大で何に取り組んでいったらよいかの方針を立てる上でのヒントになっていた。	・『大学・短大進学講座』では、卒業生(附属高校から系列大学・短大へ進学して卒業した卒業生)が現在どのような形で音楽を生かして社会との関わりを持っているかを具体的に紹介されていた。中学校音楽科教員、自衛隊音楽隊の隊員、音楽療法を実践している施設職員、演奏活動に従事している卒業生、音楽教室指導者などから、それぞれの現場での様子とその職業に関するための具体的な取り組み方なども具体的なアドバイスとして伝えられ、高校生のキャリア教育の一步となっていた。	A	・最近では、高校生とその父母は大学・短大を卒業した後の具体的な社会との関わり方の部分をシビアに見据えて進路決定をする傾向が強まっている。『大学・短大ではどのような人材を育て、その育成のためにどのような指導・教育がなされているのか』を具体的に分かりやすく、どのように高校生とその父母に示していくかが大きな課題である。大学・短大と附属高校との綿密な情報の共有を前提に、生徒一人一人の寄り添った進路指導を進めて行くこととする。
	○ 『音楽芸術への実践的な取り組み』 ・2018年12月8日(土)、9日(日)、オペラ『トスカ』への出演 ○ 東邦音楽大学・学園創立80周年記念イベントon4.29. 学園創立80周年記念イベントon10.8.	・5月にオペラ彩主催、オペラ『トスカ』への出演依頼が東邦音大・短大・東邦第二高等学校にあり、『合唱』での参加が決定する。 ・附属中学校・高等学校・第二高等学校合同演奏会(30.4.29)各学校より演奏者の選抜して、本校音楽ホールにて開催。 附属中学校・高等学校・第二高等学校合同合唱(30.10.8.) ・式典において各学校全生徒による校歌の合唱 附属中学校高等学校第二高等学校合同演奏(30.10.9.)各学校ウインドオーケストラの合同演奏	・高校1、2年生14名が合唱のメンバーとして出演した。8月より土曜日、日曜日を中心に稽古が始まり、生徒達は全く初めてオペラに挑戦することとなる。勿論、全体の稽古以外に第二高校の声楽専攻の専任教諭が放課後等、学内で合唱(基礎練習)の指導をし、それを全体練習に生かせるようにした。	・10月からの立ち稽古では、プロで活躍されている東邦音大の佐藤泰弘氏が参加された。プロの中で、生徒達は相当の緊張感を感じながら演技と歌に意欲的に取り組んでいた。	・11月の本番が近づいていき、衣装合わせやオケ合わせと、オペラが仕上がり行く中で、生徒達は見違えるように生き生きと歌い演じることが出来るようになって来た。	・本番の2日間は大盛況で会場、サンアゼリア(和光市)は熱気に溢れていた。生徒達は意外と落ち着き、稽古の時より役になり声高々に個々の役を立派こなしていた。 大勢のプロの方々と共に盛り上げる大舞台の一員として出演出来たことは、生徒にとって大きな喜び・感動となり、一人一人の音楽感に大きな変化と新しい広がりを与えることとなった。		・今年度のオペラ彩主催、オペラ『トスカ』への出演に引き続き、来年度はヴェルディのオペラ『ナブッコ』(2019.12.21.22)への出演依頼が来ており、音楽科の生徒達にはこの上ない魅力であり、日常の学習では味わえない貴重な体験を得られるチャンスなので、他の学校行事とのバランスを考慮しながら前向きに生徒の参加を検討していくこととする。
全般	○ ボランティア活動とその具体化についての再検討	・ボランティア演奏会の実施。 川越市東部地域ふえあいセンターでのミニコンサート(30.5.25) 南古谷病院でのミニコンサート(30.5.31) 帯津三敬病院でのミニコンサート(30.12.20) 川越プリンスホテルサロンコンサート(31.1.24) (ボランティア活動の内容と活動範囲を検討する)	・ボランティア演奏会の実施計画の作成 演奏者は会議で選考し、演奏形態・演奏曲目は各演奏会ごとに検討する。	・ボランティア演奏会は生徒達にボランティアの意義を認識させると共に、生徒達はその場に相応しい演奏の在り方を創意工夫しその演奏の準備に自主的に取り組んでいる姿勢が見受けられた。 生徒達は、改めて『ボランティア』とは何か、その活動とはどのようなべきかを考察していた。	・ボランティア活動を通して、生徒は人に対する思いやりと、チームワークの大切さを学んだ。 『ボランティア』自体の提議はあるが、それを生徒がこれまでの自己の体験でどのように受け止めてきたかの難しさがあった。	・生徒達はボランティア演奏会を通して、ボランティア活動の社会的意義と色々な形で演奏会の在り方を学習した。(2012年ボランティア支援団体国際ソロプロチスト埼玉からの認証を受けて以来、毎年その活動には意欲的に取り組んでいる。 ・『第10回国際ソロプロチスト埼玉・クラブスペース・ホール』(平成31年3月23日土曜日：14:00～16:30)に2名参加。 「あなを夢ををはばむものは何ですか」というテーマに基づき論文作成、グループディスカッションを行った結果、第2位、第3位をそれぞれ受賞した。	A	・ボランティア活動は『演奏会』のみに限定せず、様々な形態を検討し、更なる充実と推進に努めることとする。 ・来年度は、『国際ソロプロチスト埼玉』に於けるボランティア活動への参加を予定している。
	○ 地域貢献を目指した演奏活動	・南古谷ウインドオーケストラの活動 (南古谷地区中学生との活動) ・南古谷ニューイヤーコンサート (南古谷地区の小・中・高等学校、また地域住民との活動)	・南古谷ウインドオーケストラの活動 ニューイヤーコンサートin南古谷への出演 (南古谷及び第二高校ウインドオーケストラ・合唱の演奏)	・毎週土曜日午後の東邦音楽大学での地域の中校生・高校生・一般社会人から構成されている、南古谷ウインドオーケストラの練習(演奏)は『地域の音楽芸術に対する意識の向上』に長年に渡って貢献している。	・ニューイヤーコンサートin南古谷の準備・打ち合わせを始める。(平成31年1月14日開催予定)	・生徒達は『地域に根ざした音楽への意識の向上』を目指した南古谷ウインドオーケストラの演奏活動は、ニューイヤーコンサートin南古谷をメインに今後益々その練習・演奏活動を活性化させていくこととする。		・『地域に根ざした音楽への意識の向上』を目指した南古谷ウインドオーケストラの演奏活動は、ニューイヤーコンサートin南古谷をメインに今後益々その練習・演奏活動を活性化させていくこととする。
	○ 埼玉県近郊の『音楽系高等学校との合同演奏会』の実施。音楽専門教育の活性化を図る為に	・音楽教育の活性化を図る為に近隣の音楽系高等学校が参加して、合同演奏会を開催している。(東邦第二高等学校主催)	・『第八回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』(6月16日土曜日)を本校が主催し、本校音楽ホールで各校の代表演奏者による演奏会を実施する。本校生徒は全員その演奏を鑑賞する。	・この演奏会は出演者の演奏への意欲の向上と、聴く生徒に演奏者から演奏と向かい合う姿勢を学ぶ良い機会となっている。	・『第八回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』の事前打ちに関しては各学校の校務状況を鑑み、電話・メールによるものとした。	・演奏会を通して『各学校の演奏した生徒達は、それぞれが日々の自分の演奏のテクニク・表現力などを振り返りつつ、良い機会となっていた。同時に『音楽系高等学校間の親睦』にも大いに貢献できていた。		・『第九回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』は来年6月15日(土)に開催する予定。学校間の交流を図りつつ、生徒達の演奏技術と音楽性の向上に更により良い演奏会を目指して行くこととする。

達成度 A:ほぼ達成(8割以上) B:概ね達成(6割以上) C:変化の兆し(4割以上) D:不十分(4割未満)